

# 西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年

大坪 芳典

## はじめに

今回は、西北九州における縄文時代早期前・中葉の貝殻文円筒形土器と押型文土器とを対象とした約2千年に渡る時期の土器編年の研究成果を発表したい。本稿の目的は、大きく2つがある。1つ目は、本稿の土台となった論稿の発表を昨年（大坪 2015a）に宮崎考古学会で行ったが、その発表では、特に百花台Ⅰ～Ⅲ式土器について十分に書き足りていない事が多かったため、本稿では、その論文に加筆し発展させて、さらに縄文時代早期の貝殻文円筒形土器と押型文土器の各型式についての属性も詳しくまとめた。2つ目は、先の宮崎考古学会での発表で長崎・佐賀県についての内容を発表したのが、南九州での発表であったこともあり、長崎県の研究者には目に留まりにくいことも考えられた。長崎県の縄文時代早期前・中葉の土器は、未だ時期の判別が難しいものや各型式の認識に誤解が見られる点もあり、そのため当該期の土器が出土した際に多いに活用して頂きたく、長崎の地を代表する考古学の研究誌の一つである『西海考古』で発表することにより周知したいと考えた。

また、1998年に水ノ江和同氏が長崎県は、大分編年が援用できない地域と述べられて、渡邊康行氏をはじめ長崎県の研究者も編年作成の必要性を強く言われてきた。この頃より私は、長崎県に新たな編年を確立する必要性を感じ、研究を重ねてきた。すでに15年以上が経過している今、ようやく長崎県の押型文土器の編年の骨子となるべき編年案を作るに至り、今回提示させて頂くこととした。

## 1. 研究史

西北九州における縄文時代早期の貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年を検討するにあたりまず、その研究史を整理したい。九州の貝殻文円筒形土器と押型文円筒形土器については、1977年に賀川光夫氏や高木正文氏らにより、具体的に論じられており、これが初見だと思われる（賀川 1977、高木 1977）。高木氏は、熊本県の貝殻文・押型文の円筒形土器を集成し、その特徴・分布・遺構との共伴遺物・時期についてまとめている。ただし、円筒形土器と塞ノ神式土器の共伴事例を理由に、平底押型文土器や円筒形土器を縄文時代早期後半と捉えていた。

1984年、多々良友博氏は、弘法原遺跡から円筒形押型文土器が出土していることに着目した。しかし、この段階でも「安定した平底をもつ土器は押型土器でも終末に位置付け」（多々良 1984）であり、具体的には、手向山式土器の時期あたりと考えられていた。

1986年、山崎純男氏と平川裕介氏は、円筒形押型文土器について「口縁部が直行し、円筒状あるいは底部に向かってすぼまる器形で底部は安定した平底をなす。長崎県弘法原遺跡～（略）～に好例がある。文様は一般に山形文が多く、全体に横走施文してあり、口縁内面は無文のままで、丁寧な磨き調整を行っているものも多い。この手の押型文土器は最近、円筒形押型文土器と仮称されている。この円筒形押型文土器は施文文様が押型文であるのを除けば九州南西部に広く分布する、いわゆる円筒土器となら変わるところがない。最近南九州の貝殻文円筒土器の編年も大きく変化し、従来の編年の位置よりもさかのぼるとみられる。円筒土器の一部もさらに古くさかのぼるものが散見され、少なくとも押型文のある時期とは併行関係にあるものと思われる。このように考えてくると、平底の押型文土器の一部は、押型文土器がその分布範囲を拡大する過程の中で、円筒土器（貝殻文円筒土器）と

の接触，影響によって，円筒形押型文土器が発生したと考えられる。」(山崎・平川 1986)と述べており，円筒形押型文土器を時間的に古く遡らせて位置付けている。また，円筒形押型文土器の属性まで詳細に記述しており，より深化した考えを示した。

さて，1998年以前の西北九州の縄文時代早期の押型文土器の研究は，大分地方を中心に編年され，いわゆる大分編年と呼ばれるものが援用されていた。その研究の流れを大きく変えた画期的な論文を，1998年，水ノ江和同氏が一野式土器と弘法原式土器の2型式を設定し発表された。また水ノ江氏は，弘法原式土器の時期を大分編年の稲荷山式土器の頃に位置付けた(水ノ江 1998)。

一方，1999年，渡邊康行氏は，1998年以前に長崎県において「過去，押型文土器の型式と編年に関する研究は，行われたことがない」(渡邊 1999)という実情を冒頭に述べて，さらに水ノ江氏の一野式・弘法原式土器の設定について検討を行っている。渡邊氏は，水ノ江氏の位置付けについて実年代と石器組成などについて大きく3点ほどの疑問を提示している。1点目は，平底の押型文土器が7300 B.P という年代を示すことから弘法原式土器の位置づけに疑問を抱いている。2点目は，弘法原遺跡より石匙が出土しており，北部九州の石匙の出現が田村式土器以降であるため整合性に矛盾があると述べた。ただし，この石匙が晩期の所産である可能性もあると言う。3点目は，弘法原遺跡が押型文土器の単純遺跡であり，これだけ充実した文化要素が大分編年の稲荷山式土器の頃に突如として出現して，その後の時期に忽然と消滅したのかという疑問点である。これらの理由から弘法原遺跡(弘法原式土器)の時期は，縄文時代早期後葉の定住要素を示す百花台遺跡群との連続として捉えた方が自然であるとし，かつ実年代と石匙の存在とも整合することや無文土器・条痕文土器との関係から，大分編年の稲荷山式から下菅生B式土器の頃に一野式土器が存在し，田村式土器の頃に弘法原式土器が出現すると述べて，水ノ江氏と異なった見解を示した。

それより数年後の2006年，筆者は，地域研究に目を向けて島原半島の押型文土器の様相について「弘法原式土器併行期に東九州系押型文土器の「器形が深鉢形・薄手化傾向の器壁・尖底+文様が押型文様」が伝播してくる。その過程で円筒形条痕文土器の一野式土器や円筒形燃系文土器に文様転換が行われた円筒形押型文土器である弘法原式土器が成立し，それに後続して早水台式土器から下菅生B式土器併行期に「器形が円筒形基調の押型文尖底の影響を受けた狭脚な平底・厚手の器壁+文様が押型文様」という特徴をもち在地化する土器が見られることを述べた(大坪 2006)。

2007年，筆者は，長崎県島原半島及び半島に所在する下末宝遺跡の壺形土器を基に九州の押型文土器様式の壺形土器についてまとめた。その際に，半島の押型文土器について，水ノ江氏が大分編年という稲荷山式土器段階の円筒形押型文土器を弘法原式土器と位置付けていたものを拡大解釈してしまい，弘法原式土器に後続する平底押型文土器も含めて誤って位置づけてしまった(大坪2007)。この頃の筆者の考え方について，弘法原式土器の出現期に関しては水ノ江氏に近い考えを有するものの，円筒形押型文土器にそれに後続する数型式の平底押型文土器も含めて弘法原式土器の範疇で捉えていたことが誤りであったと言える。

2009年，筆者は，考えを改めて，水ノ江氏が弘法原式土器を大分編年の稲荷山式土器の段階に設定したのを踏まえた上で，弘法原式土器に後続する器形が円筒形基調で押型文・尖底の影響を受けた狭脚な平底・厚手の器壁+文様が押型文様という特徴を有する，大分編年という早水台式・下菅生B式・田村式土器併行期の在地系土器を，弘法原式土器から切り離して，別の土器型式群が存在することを唱えた。その他，一野式土器の中に瘤文土器を有する土器があることを発表し，これが後の下末宝式土器として細分する土器となる。またこの瘤が稲荷山式土器の属性であるため，稲荷山式土器の併行期に一野式土器が終焉をむかえて，その後の稲荷山式土器の頃にこの下末宝式土器が成立し，早

水台式土器の頃にかけて弘法原式土器が存在する考えを述べた（大坪 2009）。

2012年、筆者は、島原半島の貝殻文円筒形土器と押型文土器を整理して、これまで弘法原式土器に後続する大分編年の早水台式・下菅生B式・田村式土器と併行する土器群、いわゆる狭脚な平底を有する押型文土器（平底押型文土器）を百花台・下末宝遺跡の一群と称して位置付けた。また一野式土器から瘤を有する土器を細分して別け、2009年の頃に述べた瘤を有する特徴をもつ土器を下末宝式土器として設定した（大坪 2012）。この論文が2015年に発表する編年の骨子となった。

2015年1月、先述した宮崎考古学会で発表した論文で、筆者は2012年に設定した百花台・下末宝遺跡の一群をようやく百花台遺跡群の資料をもって広義の百花台式土器（註1）と位置付けることができた。その広義の百花台式土器を細分して次のように設定した。弘法原式土器に後続する百花台Ⅰ式土器を大分編年の早水台式土器に、百花台Ⅱ式土器を大分編年の下菅生B式土器に、百花台Ⅲ式土器を大分編年の田村式土器に併行するものとして位置付けた。その他、尖底の政所式土器に併行する貝殻文円筒形土器のものを小ヶ倉式土器と設定して、その後の下末宝式土器の設定の再確認を行った（大坪 2015a）。

2015年5月、岡本東三氏は、九州の押型文土器の出現とその前段階の土器の編年を整理する中で、弘法原式土器の時間的位置付けについて「水ノ江氏は一野式土器と弘法原式土器の関係について、山崎・平川両氏同様、前者が古く、後者が新しいとする見解を示し、後者の弘法原式土器を稲荷山式段階に位置付けている（水ノ江 1998）。この水ノ江氏の見解に対し、渡邊康行氏は弘法原式が田村式以降の可能性を模索している（渡邊 1999）。近年、大坪芳典氏は円筒形条痕紋を2段階（一野式土器・下末宝式土器）に分け、弘法原式をやや下げて早水台式土器近くに位置づけている（大坪 2012）」と評価した（岡本 2015）。筆者が弘法原式土器を早水台式土器近くに位置付けたと書かれているが、誤解がないように断っておくと、厳密には2009・2012年及び2015年段階での筆者の発表（大坪 2015a）の表1 西北・西九州編年比較表参照）では、弘法原式土器を大分編年の稲荷山式土器の後半の頃に出現し、早水台式土器のいずれかの段階まで併行し存続した土器だとする考えを示している。

このように弘法原式土器の編年的な位置付けが困難な原因の一つに、大分編年の稲荷山式土器や早水台式土器の存続期間が想像以上に長きに渡ることが考えられ、大分編年の稲荷山式土器だけでも、西北九州の土器が数型式に渡り併行していたと思われる。この弘法原式土器とその前後の土器の編年的な位置付けについては、複雑さを呈しているため次の節以降で、土器型式ごとに説明する際にあらためて述べたい。

## 2．西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器について

それでは、西北九州における縄文時代早期の研究の過程と現状を説明した上で、いよいよ早期の中でも押型文土器の時期とそれ以前の貝殻文円筒形土器について各型式の属性・年代観・他地域との比較・出土例などを整理し検討したい。

### (1) 西北九州の貝殻文（撚糸文）円筒形土器

#### ① 小ヶ倉式土器

2015年、小ヶ倉式土器は、佐賀県佐賀市富士町の小ヶ倉（こかくら）遺跡で発見されたもの（第2図1）を標式土器として設定した（大坪 2015a）。小ヶ倉遺跡の標式遺物については、その報文に詳しく説明されており「底部は確認できなかったものの、A区東部でほぼ1個体分が押しつぶされた状態で出土した。口縁部はわずかに内傾する部分もあるが、ほぼ直立する円筒形で、口縁端部は丁寧に

面取りされている。口縁部外面に櫛状工具で横位に数段の刺突文を施すが、何段になるかは確認できない。施文具の幅は約0.2cm<sup>3</sup>であるが、原体については不明である。器面調整は、ハケメ状の痕跡を残す板状の工具によるものと思われる縦あるいは斜め方向のナデで、内面は更に平滑に仕上げる丁寧なナデが見られる。」またその土器に付着した炭化物による<sup>14</sup>C年代測定の結果、9565 ± 30yrBP、1σ暦年較正用年代が9566 ± 31yrBPであった（渋谷・徳永・パレオラボ AMS年代測定グループ 2011）。この結果、年代的に約9500～9600年前の資料で縄文時代早期前葉の時期を示していた。小ヶ倉遺跡の小ヶ倉式土器は、櫛状工具文と言う点では貝殻腹縁文と類似しており、この土器型式の文様に貝殻腹縁文とその擬似的な櫛状工具文のものがあるようである。また小ヶ倉遺跡の土器は、円筒形土器であり、残存状況より平底と考えられる。このように西北・西九州で分布し、口縁部外面に貝殻腹縁文とその擬似的な櫛状工具文という文様を有し、かつ平底の円筒形土器のような特徴をもつものを小ヶ倉式土器として設定した（大坪 2015a）。小ヶ倉遺跡以外での小ヶ倉式土器の出土例は、古くから西北・西九州では佐賀県伊万里市白蛇山岩陰遺跡・有田町盗人岩洞穴遺跡や長崎県佐世保市岩下洞穴遺跡・島原市一野遺跡から出土している事が知られていた。近年では、雲仙市吾妻町<sup>さらいまつ</sup> 松遺跡において貝殻腹縁文で底径の広い底部を有する小ヶ倉式土器に該当する口縁部が数点出土している。

九州で小ヶ倉式土器と同時期の土器として東九州を中心として北部九州あたりまでを分布域とする政所式土器がある。その政所式土器は、中原Ⅱ式土器と口縁部の属性が同一で時間的に併行すると考えられる。政所式土器を型式設定した賀川光夫氏は、「口縁部に貝殻文が施されて、アナダラ属の腹縁を縦位に当て、押捺して凹凸刻文を上下三列に並列させたものである。底部は尖り、その部位は肉厚に作られる」と口縁部に貝殻文を施す尖底を最大の特徴とすると述べている。すなわち、東九州を中心として北部九州に分布する政所式土器が、尖底であるのに対して、西北・西九州を中心として分布する小ヶ倉式土器は、貝殻文・櫛状工具文の文様を施し、平底であることが最大の特徴と言える。ただし、在地系の貝殻文・櫛状工具文を施す平底円筒形土器の小ヶ倉式土器分布圏に、今後、稀に政所式土器が出土する可能性は大いに有り得る。数量で考えれば、それはあくまでも西北・西九州に伝播した外来系土器と言うことになるのであろう。

## ② 一野Ⅰ式土器・一野Ⅱ式土器の設定

一野式土器は、1998年、水ノ江和同氏が島原市有明町の一野遺跡で発見されたもの（第2図7～9）を標式土器として設定した（水ノ江 1998）。それを本稿では、一野式土器を一野Ⅰ式土器と一野Ⅱ式土器とに細分して設定する。詳細については、後述する。水ノ江氏は、一野式土器（のちほど設定する一野Ⅱ式土器）について「貝殻文円筒形土器で普通は条痕文土器と呼ばれている一群」で「底部は平底で、器形・口縁部ともほぼ立ち上がる円筒形。口縁部から胴部上半にかけて、二枚貝の腹縁を器面に押しつけ横位に条痕文の文様を3～6条巡らすのが最大の特徴である。器面調整はナデで、横位の条痕文の施文部については、同一原体による縦位の条痕文が横位のそれの下に窺えるが、これは器面調整と文様の両方の要素を兼ね備えているようである。横位の条痕文の文様については、ごく緩やかな波状文や押引文の手法により一見山形の押型文のように見えるものもある。～（略）～押型文とは明らかに異なったものである。～（略）～貝殻円筒形土器には無文土器が存在しないことである。」と説明されている。その他、器形の特徴として口唇部に面取り調整を行うものもある。

水ノ江氏は、型式設定を行う際に時間的な位置付けについて、弘法原式土器に先行する土器群としている。木崎康弘氏は、熊本県を中心とした中九州地域についての編年表で、中原Ⅲ式土器を稲荷山式土器に併行させて、中原Ⅳ式土器を早水台式土器に、中原Ⅴ式土器を下菅生B式土器や田村式土器・

沈目式土器に併行させている（木崎 1998a）。その表との対応関係で言えば一野式土器は、中原Ⅲ式土器と併行関係にある。しかしながら、中原Ⅳ式土器も貝殻腹縁の条痕文を特徴にもつことから、一野式土器は、中九州の中原Ⅲ・Ⅳ式土器と併行期にあると考えられ、大分編年の川原田式土器・稻荷山式土器かそれ以前の時期に併行して存在していたと考えられる。

長崎県内から出土する一野式土器（第2図6）は、土器外面の口縁部から胴部にかけての部分に施文するが、その文様帯の幅は、器高に対して凡そ2分の1であるものが大半である。一方、島原市畑中遺跡から出土する一野式土器は、口縁部外面に幅狭な文様帯が見られる。先述した2分の1という表現で言うならば器高に対してその文様帯の幅は、5・6分の1程度で狭い。その違いは、熊本県で標式設定された中原Ⅲ・Ⅳ式土器の属性に類似している面も見られる。木崎康弘氏は、中原式土器の設定でその文様帯が拡大化したという考え方から中原Ⅲ式土器から中原Ⅳ式土器へ変遷を考えている（木崎 1998a）。元々、一野式土器と中原式土器とは属性が類似する点が多い。このことから、文様帯が狭い畑中遺跡の資料から、一般的にこれまで一野式土器と言われている幅広な文様帯の土器群へ変遷する可能性が高い。以上のことから、基本的に一野式土器の円筒形の器形で二枚貝復縁による条痕文は類似するものの、外面の幅狭な文様帯を最大の特徴として、畑中遺跡で出土した土器をもって「一野Ⅰ式土器」と呼んで設定したい。ところで、畑中式土器ではなく一野Ⅰ式土器としたのは、文様帯を除いて基本的な属性が一野式土器と共通し、大枠として一野式土器の範疇で捉えたいためである。ただし、編年で新旧関係を示すために一野式土器を細分して「一野Ⅰ式土器」と設定する。一方、従来一野式土器とされていたものを「一野Ⅱ式土器」と呼んで新たに設定したい。その上で、一野Ⅰ式土器から一野Ⅱ式土器へ変遷する可能性があることを付け加えたい。その時間的な位置付けについては、一野Ⅰ式土器が大分編年の川原田式土器もしくはそれ以前の土器と併行し、一野Ⅱ式土器が大分編年の稻荷山式土器と併行する時期だと考えられる。

さて、一野遺跡・畑中遺跡以外での一野式土器の主な出土遺跡は、南島原市大崎鼻遺跡、島原市稗田原遺跡、諫早市鷹野遺跡・西輪久道遺跡・牛込A・B遺跡、大村市岩名遺跡（渡邊 1999）、その他南島原市下末宝遺跡・上畦津遺跡（大坪 2007）などで出土している。その状況から長崎県では、県央から島原半島にかけて分布する。ただし長崎県外でも出土例があり、福岡県八女郡立花町白城西原遺跡（水ノ江 1998）や春日市原ノ口遺跡、大野城市本堂遺跡（林 2007）、熊本県一帯で出土している。このように島原半島を中心として一円に広がる一野Ⅰ・Ⅱ式土器は、長崎県では大村市を北限とし、東に福岡県八女郡立花町、北東に春日市や大野城市、南東の熊本県一帯に中原Ⅲ・Ⅳ式土器として広く分布している。さらに広域を見ると大分県を中心に九州内で広く分布する尖底で砲弾形の器形を有する古手の押型文土器（川原田式・稻荷山式土器もしくは川原田式土器以前の土器）の時期に、それ以外の地域では一野式土器、中原Ⅲ・Ⅳ式土器、石坂式土器、別府原式土器といった基本的に貝殻円筒形土器という様式を用いながら、各地域で多様性のある土器様相を呈していたと言える。

### ③ 下末宝式土器

下末宝式土器は、2012年、南島原市の下末宝遺跡で発見されたもの（第2図12）を標式土器として設定した（大坪 2012）。下末宝式土器とは、一野Ⅱ式土器の衰退型式であり、東九州の稻荷山式土器に見られる瘤文を有することから一野式土器に後続し、大分編年の稻荷山式土器に併行する弘法原式土器の前段階の土器と考えられる。

次に下末宝式土器の属性を説明する。器形は円筒形土器であるが、一野Ⅱ式土器が胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるのに比べて、胴部を最大径として口縁部の径が僅かに小さい。また

口縁部が外反気味である。底部は確認されていないが、一野Ⅱ式土器で見られるような平底と考えられる。器壁の厚さは、1.3<sup>cm</sup>と厚みがある。文様は、外面に撚糸文を横走施文後に縦走施文する。また加えて斜方向施文も見られる。内面に横方向にナデ調整を施し、指頭圧痕が見られる。口唇部は、丸く撫でる。最大特徴は、口縁部上端の外面に稻荷式土器で見られる瘤文を有する円筒形土器という点である。特にこの瘤文の属性が時期の判別に繋がったと言える。この土器はまだ発見されたばかりで類例は見られないが、今後発見されていくことであろう。

## (2) 西北九州の押型文土器

### ① 弘法原式土器

弘法原式土器は、1998年、水ノ江和同氏が雲仙市吾妻町の弘法原遺跡で発見されたもの（第2図13～15）を標式土器として設定した（水ノ江 1998）。水ノ江氏は、弘法原式土器の特徴について「底部形態は大きくしっかりとした平底で、網代状圧痕が比較的多く見られる。口縁部は、外反することがほとんどなく直線的で、器厚は10～15<sup>mm</sup>と厚く、器形はほぼ円筒形でまっすぐに立ち上がるかやや開く。文様は山形文が圧倒的に多く格子目文や楕円文も含まれるが、縄文や撚糸文もごく少量存在するようである。そしてもう一つ注目したい特徴が、無文土器は量的に極めて少ないという事実である」として設定した。西北九州に一野Ⅱ式土器の終焉から下末室式土器が用いられていた時期に東九州方面より押型文土器のうち器形が深鉢形、薄手化傾向の器壁、尖底＋文様が押型文様の土器が伝播してくる。その過程で貝殻文円筒形土器の一野Ⅱ式土器や円筒形撚糸文土器の下末室式土器に、押型文の文様が施されることにより誕生するのが円筒形押型文土器の弘法原式土器である。

弘法原式土器の年代的な位置付けについては諸説ある。弘法原式土器は、大分編年という稻荷山式土器併行期として設定された（水ノ江 1998）。筆者も以前まで弘法原式土器は稻荷山式土器を起源に、その後に後続する器形が円筒形基調の押型文尖底の影響を受けた狭脚な平底、厚手の器壁＋文様が押型文様といった特徴の早水台式・下菅生B式・田村式土器併行期までも含めて弘法原式土器として捉えていたが、弘法原式土器は稻荷山式土器の後半の頃に出現し早水台式土器の古段階の頃にかけて位置づけて（大坪 2009）、その後、狭脚な平底土器には別型式を与え整理した方が賢明であると考えを改めた（大坪 2012・2015）。

さて、弘法原遺跡で出土している弘法原式土器と明確に判別するためには、器形の残存状況が良くないと判別しがたく、その後の、百花台Ⅰ～Ⅲ式土器も弘法原式土器と誤認してしまう可能性がある。そのため、弘法原遺跡を除く長崎県における明確な弘法原式土器の主な出土遺跡は、南島原市大崎鼻遺跡・島原市百花台遺跡群・雲仙市龍王遺跡・大村市岩名遺跡など限られた遺跡である。分布域は一野Ⅱ式土器と同様に島原半島を一円として県央付近まで分布するようである。

### ② 百花台Ⅰ式土器

百花台Ⅰ式土器（註1）は、2015年、雲仙市国見町の百花台遺跡群で発見されたもの（第3図17）を標式土器として設定した（大坪 2015a）。百花台Ⅰ式土器とは、大分編年の早水台式土器の後半期に併行する時期の土器であり、弘法原式土器に後続する。百花台Ⅰ式土器の器形は、早水台式土器の器形の伝播による影響を受けることにより、かろうじて弘法原式土器由来の円筒形ともいえるが深鉢形の傾向が見られる。弘法原式土器が胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるのに比べて、百花台Ⅰ式土器は、口縁部が僅かに外反して胴部が若干膨らみ、胴部より下半が底部に向かいすぼまる。口縁部から底部にかけて残る完形のものは出土していないが、弘法原式土器より底径が小さな狭脚な

平底である。器壁も弘法原式土器程度の厚さのものから、それに比べて薄手のものも見られ、厚さは、1号程度のもからそれより薄いものもある。口唇部の形態は、丸身をもつものと、面取りを行うものがある。文様については、大分編年の早水台式土器が押型文様を横方向に施文するのに比べて、百花台Ⅰ式土器は、器壁外面に山形文や楕円文・平行文などを縦や斜方向に施す。これは早水台式土器が綺麗な砲弾形の器形であり口縁部が直線的であるため文様を横方向に原体を回転施文することが可能であるが、百花台Ⅰ式土器は胴部から口縁部にかけて僅かに外反するため横走施文が不可能で縦・斜方向に施文具を用いて施文すると考えられる。土器内面には、全面無文のもの、口縁部上部に山形文・楕円文・平行文を横方向に施すもの、口縁部上部に短めな原体条痕を施すもの、それに加えて下に山形文・楕円文・平行文を施すものがある。また口唇部にも山形文や稲荷山式土器の属性と思われるような刻目の文様を施すものもある。ちなみに平行文は、東九州で見られない文様で、長崎・熊本を中心とした中九州に分布し、佐賀・福岡にも僅かに見られることから在地系土器の特徴といえよう。その他、文様の大きさについて楕円文で顕著にみられるが、早水台式土器の特徴と類似する小粒な文様を施文する。つまり百花台Ⅰ式土器は、早水台式土器が西北九州に伝播することにより文様・器形に影響を受けつつも、平底を基調とした在地土器の特徴を残して他地域に見られない独自の土器が成立したと思われる。また、百花台Ⅰ式土器は、東九州系の早水台式土器と共伴して出土することもある。

さて、百花台Ⅰ～Ⅲ式土器は、大分編年の土器の伝播による影響を強く受けているため、その概要を説明しておく必要がある。大分編年の稲荷山式・早水台式・下菅生B式土器の器種は、尖底の深鉢形土器が大半であり、壺形土器が共伴する。稲荷山式・早水台式土器の深鉢形土器の器形は、逆三角形の直線的な器形から、時代が下るにつれて下菅生B式土器の頃に胴部から口縁部にかけて外反し、田村式土器の頃に胴部が膨らみだす。口縁部の形態は、波状口縁と平坦口縁とがある。底部の形態は、本州から九州に伝播した初期が尖底で、田村式土器の頃には尖底から平底化する。従来、大分編年では完全に平底になったものをヤトコロ式土器と呼んでいた。ヤトコロ式土器は、賀川光夫氏によって設定されたが(賀川 1965)、後に「外反する口縁をもち、押型文が粗大化(山形・楕円)し、縦走施文が顕著となる。器壁はやや厚手化し、底部は平底となり、押型文土器の終末、円筒土器への移行の時期が考えられる」(賀川 1982)として再設定している。この土器の位置付けに関しては、円筒形かつ平底化したものをヤトコロ式土器とするが、改めてその土器属性の再抽出・分析を行い、水ノ江氏の指摘するように再検討を行う必要がある(水ノ江 1998)。その後、手向山式土器が続く。これらの大分編年の押型文土器群は、西北九州の視点に立てば外来系土器で、主に東九州を中心に北部九州・西九州一円に分布し、九州全域に出土例が見られる。

縄文時代早期中葉、西北九州では、円筒形押型文土器由来の狭脚な平底を有する押型文土器である在地系の百花台Ⅰ～Ⅲ式土器が分布する。一方、本州からの強力な伝播を受けて東九州方面から西北九州に伝播・流入した土器は、外来系の押型文土器と言える搬入品や模倣品といった客体の土器が稲荷山式土器以降に到来していたようである。

それでは、百花台遺跡群を除く百花台Ⅰ式土器の主な分布であるが、南島原市下末宝遺跡・権現脇遺跡、雲仙市石原遺跡などを中心として西北九州に分布する。長崎県ではないが隣接する佐賀県鹿島市不動遺跡では、百花台Ⅰ式もしくはⅡ式土器の山形文様を有する狭脚な平底が出土している。

### ③ 百花台Ⅱ式土器

百花台Ⅱ式土器は、2015年、雲仙市国見町の百花台遺跡群で発見されたもの(第3図18・19)を標

式土器として設定した（大坪 2015a）。百花台Ⅱ式土器は、百花台Ⅰ式土器に後続する時期のもので、大分編年の下菅生B式土器に併行するものである。器形は、百花台Ⅰ式土器に比べて深鉢化が進み、円筒形の面影が見られなくなる。口縁部は外反し、中には「く」の字状に強く外反するものもある。胴部より下半は、百花台Ⅰ式土器に比べて底部に向かいすぼまる。器壁も弘法原式土器程の厚さのものから、さらに薄手のもが見られ、厚さは、1釐程度のもや薄手のものまでである。口唇部の形態は、丸みがあるものと面取りするものとがある。口縁部から底部にかけて残る完形のもは出土していないが、東九州の伝播の影響のために弘法原式土器・百花台Ⅰ式土器よりは底部の径が小さい狭脚な平底と考えられる。文様は、下菅生B式土器の影響を受けたためか、土器外面に楕円文・山形文を縦方向や斜方向に施文するものが多い。ただし、一部に施す平行文やその他の文様を横方向に施すものがある。施文具を縦方向に施文するのが多いのは、先述した通り口縁部の外反が強いためであろう。また楕円文の文様の大きさは、百花台Ⅰ式土器に比べてやや大きくなるが、百花台Ⅲ式土器に比べると小粒である。土器内面には、全面無文のもの、口縁部上部に山形文・楕円文を横方向に施すもの、口縁部上部に百花台Ⅰ式土器より長めの原体条痕を施すもの、それに加えて下に山形文・楕円文を施すものがある。口唇部にも山形文や稲荷山式土器の属性と思われるような刻目の文様を施すものもある。百花台Ⅱ式土器は、東九州系の下菅生B式土器と共伴して出土することがある。

百花台Ⅱ式土器も器形の面で在地化しているといえるが、文様は下菅生B式土器に類似する。それは弘法原式・百花台式土器は押型文を採用しているものの、本州・東九州で守られてきた横走施文の方法の規範を早々に破り縦・斜方向施文を用いていた型破りな土器であった。一方で、百花台Ⅱ式土器以降になると下菅生B式土器と共通する施文方法を受け入れはじめる。それは在地色の強かった弘法原式土器や百花台Ⅰ式土器から東九州からの文化を受容しだした可能性を現している。

また、百花台遺跡群を除く百花台Ⅱ式土器の主な分布は、南島原市下末宝遺跡・権現脇遺跡、雲仙市弘法原遺跡・松尾遺跡、五島市茶園遺跡、佐世保市岩谷口岩陰遺跡などを中心として西北九州に広く分布する。

#### ④ 百花台Ⅲ式土器

百花台Ⅲ式土器は、2015年、雲仙市国見町の百花台遺跡群で発見されたもの（第3図20～22）を標式土器として設定した（大坪 2015a）。百花台Ⅲ式土器は、百花台Ⅱ式土器に後続するもので、大分編年の田村式土器に併行する時期である。百花台Ⅲ式土器の器形は、口縁部が大きく開くものと口縁部が「く」の字状に強く折れるものがある。この「く」の字状に強く折れる特徴は、大分編年の田村式土器と属性を異にする。胴部から底部に向かうにつれて非常にすぼまる。口縁部から底部まで残るものは出土していないが、非常に狭脚な平底である。口唇部の形態は、丸味のあるものと面取りするものとがある。その他、深鉢のバリエーションに加えて鉢の器形がよくみられる。確実に円筒形土器の伝統は絶たれている。文様は、土器外面に粗大な楕円文や縦方向の山形文を施す。また、口縁部内面の原体条痕は長大化する。口唇部に楕円文や山形文の押型文様を施すものもある。百花台Ⅲ式土器は、田村式土器が共伴して出土することもある。

また、百花台遺跡群を除く百花台Ⅲ式土器の主な分布であるが、南島原市下末宝遺跡、雲仙市龍王遺跡・松尾遺跡などを中心として西北九州に広く分布する。

#### ⑤ 手向山式土器以降について - 権現脇遺跡の資料をもとに -

百花台Ⅲ式土器に続く縄文時代早期後半の土器は、長崎県権現脇遺跡にその変遷を窺える資料（第



4 図)がある(大坪 2006)。まず当遺跡の手向山式土器は、便宜上古段階・中段階・新段階と3段階に時期区分できる。手向山式土器の古段階としたものは、施文で山形文様が間延びしており、中段階になると施文が雑になり退化する。新段階には、ミミズばれ文を付し押型文に変わり綾杉状沈線を施す。その後、妙見・天道ヶ尾式土器は、平椀式土器が口縁部口唇に刻目を施すのに対して刺突列点を施す。また、突帯を施し、その下に沈線文を施す。後続する時期の平椀式土器になると器壁が厚さを増して、二重突帯文を貼り付け、突帯に刺突列点文を施す。その他、沈線文を施す。

この様に権現脇遺跡では、手向山式土器、妙見・天道ヶ尾式土器、平椀式土器と時間的に連続して出土している。長崎県内では、江迎町広久保遺跡で手向山式土器がまとまって出土している。

### 3. 西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年と総括 - 長崎編年の提唱 -

以上のように古い時期の土器から順を追って各型式の土器について詳細に説明した。今回、2015年に筆者が示した編年を再考するにあたり、新たに畑中遺跡のタイプの一野式土器のものを、従来の一野式土器から細分して、一野Ⅰ式土器と設定した。そのため、従来の一野式土器としていたものを、一野Ⅱ式土器と呼ぶことにした。このことから西北九州における縄文時代早期前半から中葉における土器編年は、小ヶ倉式土器 一野Ⅰ式土器 一野Ⅱ式土器 下末宝式土器 弘法原式土器 百花台Ⅰ式土器 百花台Ⅱ式土器 百花台Ⅲ式土器 手向山式土器(第1表)という流れになることが明らかになった。東九州の押型文土器の編年をいわゆる大分編年と呼ぶのであれば、この西北九州の縄文時代早期前半から中葉の土器編年を長崎編年と呼ぶこともできよう。ただし、長崎県内において、一部県北では、一野Ⅰ式土器以降から押型文土器の時期にかけて北部九州や西九州的な土器の様相が見られる傾向がある。それは、立地的にそれらの地域に近接するためと考えられる。

また、西北九州の押型文土器は、平底の器形を基本とした在地系土器が用いられている点や、文様も全国的に黄島式土器や早水台式土器の時期は、一般的に横走施文であるが、この地域では他地域に先行して、弘法原式土器では斜走施文を、百花台Ⅰ式土器では、縦走施文をいち早く用いている点が特徴であると言えよう。

今後の西北九州における縄文時代早期編年の展望と課題には、大きく2点ある。1点目は、小ヶ倉式土器と一野Ⅰ式土器の間には、時間的な空白が存在するようであるため、そこに存在していた土器型式を探す必要がある。もう1点は、縄文時代早期初頭から小ヶ倉式土器以前にかけての土器編年が確立されていないため、今後さらに早期の長崎編年の補強と検討を重ねていく必要がある。とは言え、ようやく長崎県における縄文時代早期前半から中葉にかけての編年の骨子ができたといえ、本稿が、長崎県を中心とした西北九州の編年の検討・研究を行う際の指針となれば幸いである。

#### 【謝辞】

本稿の執筆に際して安楽哲史・浦田和彦・遠部慎・竹田ゆかり・辻田直人・宇土靖之・中尾篤志・古門雅高・東貴之・本多和典・山口勝也・山下大輔・渡邊康行諸氏に御教示・御協力を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

#### 【古門雅高氏と渡邊康行両氏への還暦のお祝い】

古門氏と渡邊氏におきましては、このたび還暦を迎えられ、心よりお喜び申し上げます。

古門氏におきましては、長崎県新幹線文化財調査事務所長として、竹松遺跡を中心とした新幹線に係る調査の責任者として、今もなお第一線でご活躍されているご様子には、敬服いたすばかりでございます。古門氏には、小原下遺跡の縄文集落の調査や竹松遺跡の前期古墳・豪族居館跡や古代大型建物の調査でご指導いただきました。また西海考古7号の執筆の折に入念な文章のご指導を頂き文章力の鍛錬となりました。その後の論文を書く上で欠かせ

ないものとなっております。深く感謝申し上げます。

渡邊氏におきましては、十数年前に(株)埋蔵文化財サポートシステムへ入社した折、経験浅い私に門前遺跡の調査でご指導頂き、その後、権現脇遺跡や小原下遺跡でも調査から報告書作成に至るまで大変、手厚くご指導・ご鞭撻頂きました。諫早の小野条里遺跡の石置状の集石の調査におきましては渡邊氏が縄文説を、私が古墳説で激しく議論させていただきました。今となつては遺構が縄文時代であったと得心していますが、調査において、きちんと調べ、論を展開し、お互いの議論を重ねることの重要性を知りました。いずれにしても私の発掘調査の方法に良い意味で影響を受けているのには間違いありません。深くお礼申し上げます。

両氏には、常日頃の並々ならぬご指導とご厚情に心からの感謝と敬意を込めまして、本稿を謹呈させていただきます。両氏には、いつまでもご健康であられますように、お祈りいたします。

#### 【註】

註1 1997年、水ノ江和同氏は、百花台遺跡の縄文時代晩期土器のものに対して「百花台段階」という名称で設定されたことがある。本稿で設定した百花台Ⅰ～Ⅲ式土器とは、縄文時代早期の土器に命名しているため百花台段階とはまったく異なるものである。

#### 【引用・参考文献】

- 麻生 優 1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
- 相美伊久雄 2015「鹿児島県における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会南例会実行委員会
- 今村結記 2012「平底押型文土器に関する一考察」『研究紀要 縄文の森から』第5号 鹿児島県埋蔵文化財センター
- 上杉彰紀 2004「別府原式土器」とその周辺」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 上杉彰紀 2005「政所式土器」研究の現状と課題」『九州縄文時代早期研究ノート』第3号 九州縄文時代早期研究会
- 浦田和彦 1992『一野遺跡』長崎県有明町教育委員会
- 大坪芳典 1998「野田遺跡出土の川原田式土器」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 大坪芳典 1998「早水台遺跡の押型文土器 - 表面採集資料の紹介 - 」『Fragments』創刊号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎・川内野篤 1998「早水台遺跡採集資料(井上コレクション)の紹介」『Fragments』創刊号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 1999「早水台式土器の新例 - 竹田高校収蔵資料の提起する問題 - 」『南九州縄文通信』No.13 南九州縄文研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 1999「東九州における押型文土器の様相 - 黒山遺跡出土土器の分析 - 」『第11回人類史研究会発表資料』人類史研究会
- 大坪芳典 2000「大分県の押型文土器の一例 - 別府市尾崎園・野田遺跡について - 」『Fragments』第2号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 2000「早水台式土器の器種 - 屈曲する胴部に関する覚書 - 」『別府大学付属博物館だより』No.43 別府大学付属博物館
- 大坪芳典 2003「戦場ヶ谷遺跡の押型文土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 大坪芳典 2006「縄文時代早・前期の遺物」『権現脇遺跡』長崎県深江町(現南島原市)教育委員会
- 大坪芳典 2007「九州における押型文土器様式の壺形土器 - 南島原市下末宝遺跡・島原半島の資料をもとに - 」『西海考古』第7号 西海考古同人会
- 大坪芳典 2009「環境に影響を受けた九州の押型文土器 - 円筒形押型文土器・壺形土器について - 」『南九州縄文通信 - 新東晃一代表還暦記念論文集(上) - 』No.20 南九州縄文研究会
- 大坪芳典 2012「島原半島における押型文土器研究の再考」『九州縄文時代早期研究会』第5号 九州縄文時代早期研究会
- 大坪芳典 2015a「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会南例会実行委員会
- 大坪芳典 2015b「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」の意義について」『肥前史談叢』肥前史談叢の会(筆者作成ホームページ <http://www5.hp-ez.com/hp/otsubo01>)

- 大野安生・松川憲毅 2000「岩名遺跡」『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』Vo1.2 1997～1999 大村市教育委員会
- 岡本 勇 1966「尖底土器の終焉」『物質文化』8 物質文化研究会
- 岡本東三 2015「九州島における押型紋土器の出現とその前夜 - 円筒形貝殻紋土器と押型紋土器の相克 - 」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会
- 遠部 慎 2000「ヤトコロ式土器と出水下層式土器の関係」『九州旧石器』第4号 九州旧石器文化研究会
- 遠部 慎 2007「北部九州における縄文時代草創期～早期前半の土器群とC14年代測定」『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会
- 賀川光夫 1960「早期縄文式土器の新資料 - 大分県直入郡荻町政所式土器出土 - 」『考古学雑誌』第46巻第3号 日本考古学会
- 賀川光夫 1965「縄文文化の発展と地域性 - 九州東南部 - 」『日本の考古学』2 河出書房新社
- 賀川光夫 1977「熊本県の円筒形土器」『考古学論叢』4 別府大学考古学研究会
- 賀川光夫 1982「押型文土器の編年 - 縄文早期から前期への系譜」『政所馬渡』別府大学博物館
- 金丸武司 2004「宮崎における縄文時代早期前半の土器群 - 別府原式土器の設定 - 」『宮崎考古』第19号 宮崎県考古学会 木崎康弘 1996「第V章総括」『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会
- 木崎康弘 1998a「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題 - 早期後半土器の現状と課題 - 』九州縄文研究会
- 木崎康弘 1998b「中九州西部押型文土器の編年」『九州の押型文土器 - 論攷編 - 』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 九州縄文研究会 2007『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会
- 黒川忠広 2002『南九州貝殻文系土器』I～鹿児島県～ 南九州縄文研究会
- 黒川忠広 2002『南九州貝殻文系土器』II～宮崎・熊本・大分県～ 南九州縄文研究会
- 黒川忠広 2003「南の押型文土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 桑畑光博・上田 耕・雨宮瑞生 1993「貝殻円筒形土器と押型文土器の関係 - 宮崎・鹿児島両県における出土状況の検討 - 」『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
- 甲野 勇 1976『縄文土器の話』学生社
- 渋谷 格・徳永貞昭・パレオラボ AMS年代測定グループ 2011『小ヶ倉遺跡・入道遺跡・九郎遺跡』佐賀県教委
- 新東晃一 1996「もう一つの縄文文化 - 南九州の縄文草創期・早期の特徴 - 」『南九州縄文通信』No.10 南九州縄文研究会
- 片岡宏二 1998「宝満川流域の縄文土器概観」『干潟向畦ヶ浦遺跡』小都市教育委員会
- 坂本嘉弘 1995「西日本の押型文土器の展開 - 九州からの視点 - 」『古文化談叢』第35集 九州古文化研究会
- 坂本嘉弘 1998「東九州の押型文土器の現状と課題」『九州の押型文土器 論攷編』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 重留康宏 2003「宮崎県西部における縄文早期遺跡の概観 - 出土土器を中心にして - 」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号 九州縄文時代早期研究会
- 重留康宏 2004「前原西式土器雑考」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 高野晋司 1983『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会
- 高木正文 1977「九州の円筒土器とその編年の問題」『考古学論叢』4 別府大学考古学研究会
- 田川 肇・副島和明・伴耕一朗 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 田川 肇 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 多々良友博 1984「九州地方の押型文土器 - 文様構成から見たその動態 - 」『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会
- 橋 昌信 1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』玖珠郡九重町教育委員会
- 辻田直人・竹中哲郎 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町教育委員会
- 土橋啓介・渡邊康行 2001『大崎鼻遺跡』布津町教育委員会
- 堂込秀人 2003「南九州における押型文土器文化期の存在」『利根川』24・25 利根川同人会
- 林 潤也 2007「福岡県における縄文時代早期前葉の土器相」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会
- 古門雅高・渡邊康行 1998『広久保遺跡』長崎県江迎町教育委員会

- 本多和典 2005 『下末宝遺跡・上畦津遺跡』深江町教育委員会
- 水ノ江和同 1997 「北部九州の縄文後・晩期土器」『縄文時代』8 縄文時代文化研究会
- 水ノ江和同 1998 「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器 - 論攷編 - 』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 水ノ江和同 2012 『九州縄文文化の研究 - 九州からみた縄文文化の枠組み - 』雄山閣
- 村川逸郎 1992 『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会
- 村川逸郎 1994 『畑中遺跡』島原市教育委員会
- 森醇一郎 1974 『白蛇山岩陰遺跡』
- 渡邊康行 1999 「一野式・弘法原式土器の設定をめぐる」『西海考古』創刊号 西海考古同人会
- 綿貫俊一 1999 「九州の縄紋時代草創期末からの早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会
- 八木澤一郎 1997 「上野原遺跡第3工区 国分市」『鹿児島県の縄文文化』国分上野原シンポジウム実行委員会
- 山崎純男・平川裕介 1986 「九州の押型文土器」『考古学ジャーナル』267 ニューサイエンス社
- 山下大輔 2005 「下剥峯式および桑ノ丸式土器の再検討」『南九州縄文通信』No.16 南九州縄文研究会
- 山下大輔 2012 「宮崎の中原式土器」『九州縄文時代早期研究会』第5号 九州縄文時代早期研究会
- 山下大輔 2015 「南九州における押型文土器研究の現状と課題」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古会県南例会実行委員会
- 山下大輔 2015 「論文「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」の意義について」を讀んでのコメント」『肥前史談叢』肥前史談叢の会



第1図 西北九州における貝殻文円筒形土器・押型文土器に関する主要遺跡

第1表 西北九州編年比較表

西北・西九州		東九州（大分編年）
貝殻文円筒形土器	小ヶ倉式土器	政所式土器
	+	
	一野Ⅰ式土器	川原田式土器
	一野Ⅱ式土器	稻荷山式土器
下末宝式土器		
円筒形押型文土器	弘法原式土器	早水台式土器
狭脚な平底の押型文土器	百花台Ⅰ式土器	下菅生B式土器
	百花台Ⅱ式土器	田村式土器
	百花台Ⅲ式土器	(ヤトコロ式土器)
	手向山式土器	手向山式土器

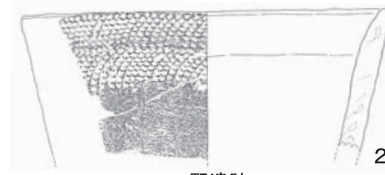
長崎編年

比較地域：大分編年

小ヶ倉式土器



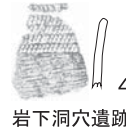
1 小ヶ倉遺跡



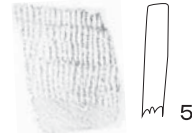
2 一野遺跡



3 白蛇山岩陰遺跡



4 岩下洞穴遺跡



5 盗人岩洞穴遺跡

中九州（中原Ⅱ式土器）

政所式土器

一野Ⅰ式土器



6 畑中遺跡



川原田式土器

一野Ⅱ式土器



7



8 一野遺跡



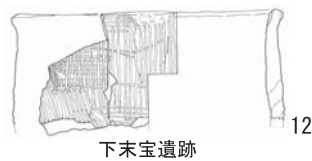
10 大崎鼻遺跡



11 下末宝遺跡

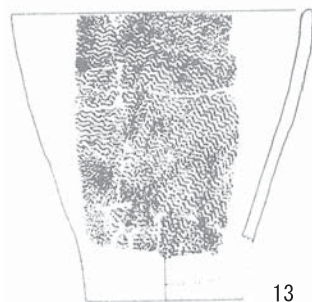
稲荷山式土器

下末宝式土器

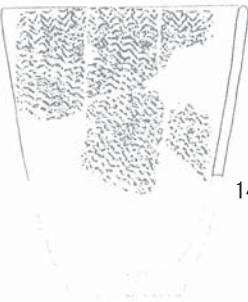


12 下末宝遺跡

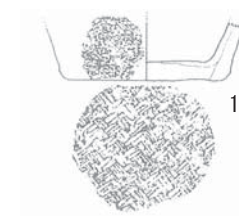
弘法原式土器



13



14



15

弘法原遺跡

早水台式土器

第2図 西北九州の貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年表①

百花台Ⅰ式土器



石原遺跡

16

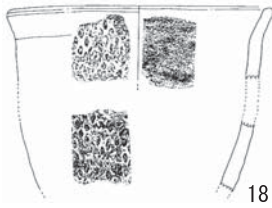


17

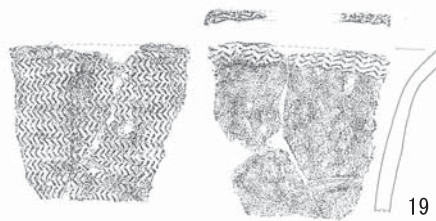
百花台遺跡群

早水台式土器

百花台Ⅱ式土器



18



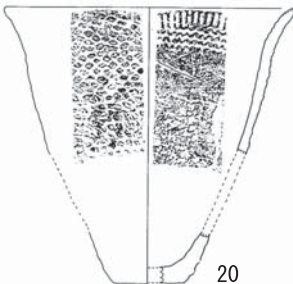
19

百花台遺跡群

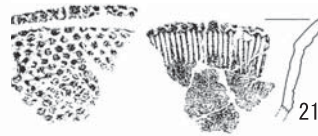
0 10cm

下管生日式土器

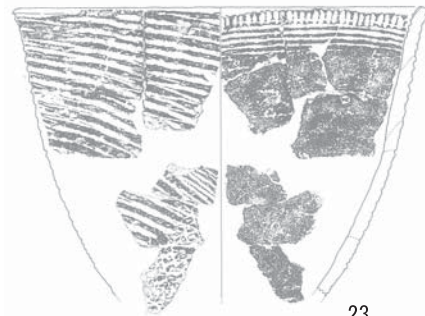
百花台Ⅲ式土器



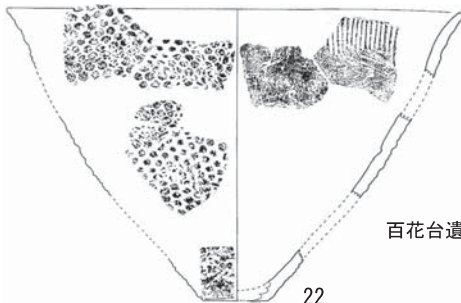
20



21

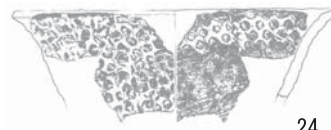


23



22

百花台遺跡群



24

下末宝遺跡

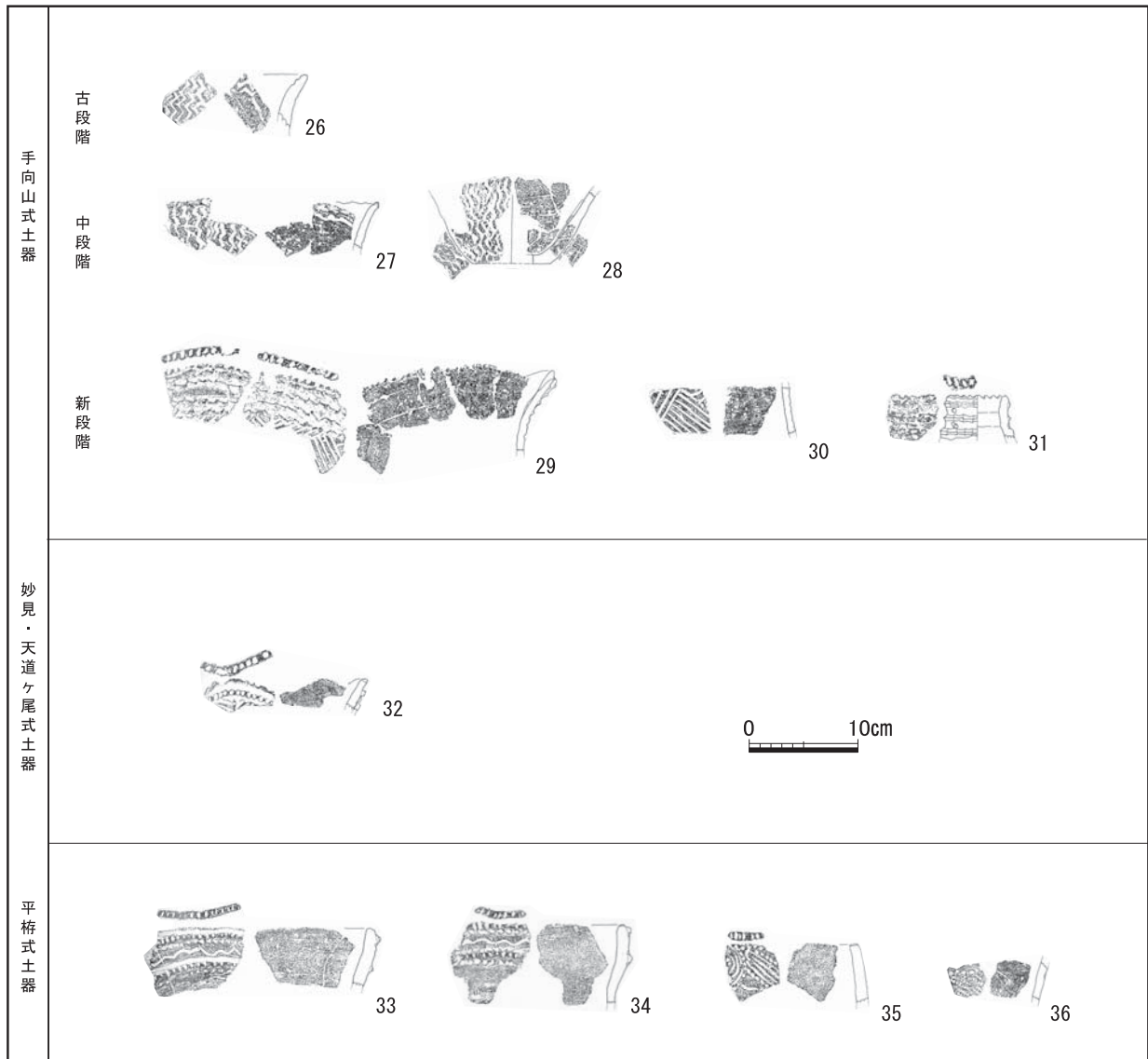


25

権現脇遺跡

田村式土器

第3図 西北九州の貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年表②



第4図 西北九州の押型文土器以降の編年表③（権現脇遺跡出土遺物）